

子どもたちの詩

モーレンキャンプふゆこ

私はアムステルダム日本人学校補習校一年担任の「ふゆこ先生」である。一年生の中頃やっとひらがなが書けるようになった子供達に日記を毎日書かせる。月曜から金曜までインターナショナル・スクールやオランダの学

校に通っている彼らには、友だちも外国人が多く、家で日本語を使っているとはいえず、放っておけば必ず英語やオランダ語の方が上

手になってしまう。毎日日本語で考える習慣をつけることは大切なことだと思ふのだが、日記といえは、今日は何と何をしたと、だらだら並べるのが精いっぱいである。

教科書に「しのひろば」という章がある。六歳の子に何が詩であるかよく説明できる訳ではないが、この章のところ毎年「先生冥利」を思ふのである。「題をつけてそのこと

について書くこと、短く行にわけて書き、読んで調子が良いこと、みんなをあっといわそうと思つて、おもしろいことを書くこと」これくらいで充分である。子供たちは、一つの文を何行にもわけて書くことから始め、短かくていいから、たくさんできると大喜びなのである。おもしろいと皆が笑つたりすれはもうこつちのものだ。顔をほころばせて大得意である。その詩たるや、まことに味があるのである。ただただ自分の気持ちを何とか上手にのべようと、四苦八苦している大人のアマチュア詩人なんぞは、顔まけである。

パンツ 一年 すぎまこと

どうして

パンツの

ごむがのびると

すぐ

ずんだれるのかな。

それは パパが

いったの

「パパはずんだれるといいました。」なんて野暮な言い方はしない。パパの出身地も、「すぐ」さがってくる様子も、皆を笑わせようとするけなげな作者も、何と素直に表されていることか。

ペン 同

ペンは

きえないけど

えんペツは

きえる

もちろんこの場合、笑わせようと思ってま
ちがえた訳ではないだろうが、それにしても
「えん、へッ」とは心にくいではないか。

でんわ

おおさわ ちさ

でんわは

すぐ

なるときも

あるし

なんない

ときも

あります

「なんない」の「ん」の一音で、がっかり
した様子、じっと待っている様子が、目にみ
えるようではありませんか。

つき きたじま しゅんすけ

つきはよるにでます

つきはきれいだね

そしてつきは うちゅうにあります

つきのうらには うちゅうじんとロケット

がいます

つきはうごきますよね

そうしてどうしてうごくのせんせい

「つきがうちゅうにある」現実的な行の後
に、うちゅうじんがいて、さいごにとつせん
「どうしてうごくのせんせい」なんて聞かれ
たら、どんなせんせいでも、うろたえること
でしょう。「こたえは自分で考えなさい」と
言えは、きつとすばらしい答がかえってくる
にちがいはありません。

うみ

同

うみはきれいだね

うみにはいろんなさかながいます

でも さめはこわいね

でも くじらはやさしいです

イタリアのうみは いちばんきれいな

うみのおと パッチャパッチャ

私はこんな詩が書きたいと、心から思う。

彼らは私を「ふゆこ先生」と呼んでくれるけれど、喜々として書き続ける彼らこそ、詩人の魂そのものだと思つづく。

(歌人・アムステルダム補習校)



* 四月号 P. 39 最終行の俳句、「故郷」は「故国」の誤りです。お詫びして訂正いたします。